

歴史の道

—いにしえをたどる—

その一

中山道碓氷峠越

なかせんどう うすいどうばいえ

中山道碓氷峠越は、上州坂本宿から信州軽井沢宿までの二里一八町（約一〇キロメートル）の区間であり、鳥居峠越とともに中山道の難所の一つであった。道は大きな落葉広葉樹の間を縫い、今もここを歩くと多くの旅人の声が風にのって聞こえてきそうな、ひつそりとしたたずまいをしている。

（写真／刎石山の道）



妻想う歌の詠まれた峠

中山道は江戸時代の五街道の一つで、東海道とともに江戸と京都を結ぶ重要な幹線道であった。群馬県内には七宿が置かれていた。碓氷峠をひかえた横川には江戸時代の三大関門の一つ、碓氷関所が設けられた。

碓冰越は入山峠とする説が有力である。碓冰峠越の開設は、入山峠越より防御が容易なことから、武士団成立後の古代末期以降と考えられ、峠に建つ熊野神社には正応五年（一二九二）の銘のある梵鐘ぼんしょうがあることから遅くとも鎌倉時代にはすでに開かれていたものと思われる。

この辺境の道を舞台にして、南朝四天王寺代の

来している。さらに、一三回目の江戸行きで、初めて中山道を通った貞原益軒、江戸から郷里の柏原へ帰る小林一茶、公用で大阪から江戸へ戻る大田蜀山人、長崎奉行に従い長崎に向かう伊沢蘭軒など、みんなこの峠を越えている。

また、明治六年二月二六日に政府の工女纂集に応じ松代を出立し富岡製糸場へ向かつた一行は、二八日にこの峠を越えている。その中の一人、和田英は「思ったほど難儀ではなかった」と峠越の感想を記している。新天地での使命感に燃えていたためか、それとも名物の力餅を食したためであろうか。

道には、現在 ところどころに素内板が立てられているだけ、ほとんど整備の手が加えられていない。しかし、往時に思いをはせると、これはこれで十分であり、ぜひ、一度歩かれることをおすすめしたい。

中山道碓氷峠越をゆく

- を吾嬬と呼ぶようになったという説話は有名である。

また、古代律令制時代の官道であった東山道の碓冰越ルートの問題がある。このルートについても、従来から碓冰峠越説と南約五キロメートルにある入山峠越説の二つがあつたしかし、近年では入山峠から多量の石製模造品を出す祭祀遺跡が発見され、古代東山道の

A black and white photograph of a traditional Japanese building, likely a shrine or temple, featuring a curved roof and a torii gate in the foreground.

熊野神社

を走つており、天然の要害地である。岐峰の道の中では中心的な場所で、寛文年中（一六七〇年頃）には人家が一三軒あり、名物の力餅屋を商う茶屋がにぎわつた。街通かずらや北に入ったところに墓碑など、の石造物が多くあるところがあるが、ここにはかつて茶屋本陣があった。経営者は丸屋六右衛門で、間取りに工夫を凝らし、上段の間が庭を挟んで左右二ヶ所に配されていた。

中山道碓氷峠越

- 1 础水閣所の遺番所跡として設けられた番所跡で、かつては番所一棟、役宅二棟があった。現在も杉林の道沿いに石垣や門扉の礎石が残る。また、道から一段高い丘陵上には、番所や役宅のあった二段の平坦面が残る。

この道は馬背状の細い丘陵の上を走っており、天然の要害地である。

峠越の道の中

で、寛文年中（一六七〇年頃）には人家が一三軒あり、名物の力餅屋を商う茶屋がにぎわった。街通かどりや北に入ったところに墓碑など多くの石造物が多くあるところがあるが、ここにはかつて茶屋本陣があつた。経営者は丸屋六右衛門で、間取りに工夫を凝らし、上段の間が庭を挟んで左右二ヶ所に配された。

6 篠沢の旅行所記

江戸開拓の歴史
第一年（一八二〇年）に建立された
人馬の休憩施設で、間口一〇間、
奥行き四間の家があった。近々に
は豊かな水量を有する沢があり、
この沢を越える人馬にとつてはま
さにオアシスであった。

碓氷峠の群馬

に鎮座する三社神社で、県境に本宮、群馬県側に新宮、長野県側に那智宮が建立されている。社伝では、日本武尊が東征帰路の際、道に迷い、紀伊国熊野の山中のナギの葉をくわえたヤタ鳥が案内して

中山道碓氷峠越

〈所在地〉 群馬県碓氷郡松井田町坂本・峠、長野県北佐久郡軽井沢町峠町
 〈交通〉 峠越道の入り口までは、JR信越線横川駅から中山道を徒歩でたどりながら、碓氷関所、坂本宿を経て約45分。

なあ、峠越道の入り口から熊野神社までは約8キロメートル、徒步で3時間程度。熊野神社から軽井沢までは車の通行も可能。

〈周辺の見どころ〉

国指定重要文化財碓氷峠鉄道施設（近代化遺産）、同名勝妙義山、県指定史跡碓氷関所跡、同横川の茶屋本陣、同五料の茶屋本陣（お東・お西）、松井田城跡、小根山森林公園、碓氷湖、蟹井沢、霧積温泉

碓氷峠の群馬・長野両県の県境に鎮座する三社神社で、県境に本宮、群馬県側に新宮、長野県側に那智宮が建立されている。社伝によれば、古式より夏至祭が行なわれ、直

歴史の道

歴史の道

いにしへをたどる

その二

なかせんどう しなのじ

中山道信濃路

中山道の難所の一つである碓氷峠を越えると、信濃路に入る。日本二の山並みを貫くこの道は、軽井沢宿から馬籠宿までの二六宿、およそ四五里（約一七七キロメートル）の区間であり、高原、峠、盆地、そして狭い谷あいを縫つて行く。まぶしい新緑の坂を、湧き上がる雲を眼下に、時に、山河燃ゆる紅葉の山腹を、さらに厳しい積雪のなかを、旅人の足音と歴史を刻み、道は今に続いている。

（写真／笠取峠の松並木）

歴史の道

—いにしへをたどる—

その三

なかせんどう ひがしみのじ

中山道 東美濃路

島崎藤村の小説に「すべて山の中である」とうたわれた木曽路を、妻籠宿・馬籠宿とたどっていくと、道はやがて美濃の国に入り、なだらかな平野部の中を続いていく。中山道東美濃路は、旧美濃国南部を横断していた中山道の東半部約四〇キロメートルをさす。石畳に紅葉舞い散るこの季節、東美濃路は往時の面影をたどる多くのハイカーでにぎわう。

(写真／琵琶峠の石畳)



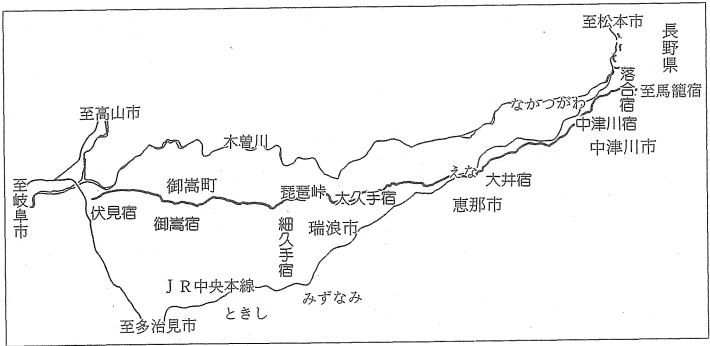
中山道東美濃路

〈所在地〉 岐阜県中津川市・恵那市・瑞浪市・御嵩町
〈交通〉 JR東海中央本線中津川・恵那・武並・釜戸・瑞浪市各駅または名古屋鉄道御嵩駅よりバスないしは徒歩。

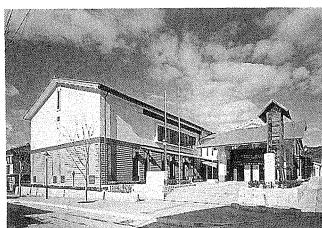
〈周辺のみどころ〉
全国最小の城持ち大名遠山氏の居城苗木城跡
(国指定史跡)、恵那峠、全国でも珍しい石の
博物館・博石館、瑞浪市化石博物館、国指定名
勝・天然記念物鬼岩、国指定名勝日本ライン



〈中山道東美濃路〉



落合宿本陣



中山道みたけ食

宿
る江戸時代以来の老松(岐阜県指定天然記念物)などが残っており、往時をしのばせる。

10 細久手宿(瑞浪市)
大火や家屋の老朽化等により往時の町並みはあまり残っていない

11 中山道みたけ館(御高町)
郷土資料館・図書館の複合施設として、御嵩宿の町並みの一角に平成八年に建設された。

江戸時代初期に、江戸と京都を結ぶ幹線道路として東海道に統いて開設された中山道は、ほぼ東山道を踏襲するかたちで旧美濃国を東西に横切っている。美濃国内には東は落合宿（中津川市落合）から、西は今須宿（関ヶ原町今須）まで一六カ所の宿場が設けられた。このうち落合宿から鵜沼宿（各務原市鵜沼）までを「東美濃九宿」、加納宿（岐阜市加納）から今須宿までを「西美濃七宿」と呼び、総称して「美濃十六宿」と称した。

岐阜県南西部の旧美濃國は、古代から東国への入口の「関国」として重要視されてきた。古代の三関の一つで唯一現存が確認されている不破関(関原町)や、美濃と信濃の国境の祭祀遺跡として有名な神坂峠(中津川市・長野郡阿智村)は、当時の官道であった東山道の沿線にあつた著名な遺跡である。

中山道東美濃路をゆく

- 1 新茶屋の一里塚 (中津川市)

2 美濃(岐阜)・信濃(長野)国境脇に南北塚とも現存。「是より北木曾路」の碑あり。

3 落合宿の石量 (中津川市)

4 落合宿から国境にかけて江戸時代の石量が現在も残る。延長約八メートル。岐阜県指定史跡。

5 落合宿から国境にかけて江戸時代の石量が現在も残る。延長約八メートル。岐阜県指定史跡。

6 大井宿本陣跡 (恵那市)

7 留守石本陣 (中津川市)

8 西行塚 (恵那市)

9 瑞浪市内の一里塚 (瑞浪市)

10 瑞浪市内の一里塚 (瑞浪市)

11 加賀藩から火事見舞いで贈られ

たとされる本陣の門や上段の間の遺構が現存。中津川市指定史跡。

宿内に六ヵ所の升形が今も残る。

門及び周辺の塀が往時のままに残る。岐阜県指定史跡。

峠を挟んで約一キロメートルにわたつて往時の石量が残る。岐阜県指定史跡。

江戸から四七番目の宿場。現在も脇本陣をはじめとする旧家や大庭蜀山人の「壬戌紀行」にも見え

並み等の中山道の遺構と景観が良好に残つてゐる。主なものとしては、東から、落合の石畳（中津川市）、大井宿本陣跡（恵那市）、皇女和宮や明治天皇の休憩所（恵那市ほか）、琵琶峠の石骨、南北石塚が四里連続して残る一里塚（瑞浪市）などがある。江戸時代の天保年間に刊行された、けいとう『深蒸宿（えんじゆく）』。安藤広重の二人の絵師により描かれた「木曾街道六十九次」に見える情景を、部分的ではあるが現在もしのぶことができ、春・秋のハイキングのシーズンには観光客も多い。

る史料によれば、文政七年（一八二四）六目にオランダ人により将軍家に献上された一つがいの駱駝が中山道を通つて江戸へ向かつたことが記されている。この時は三日間伏見宿に逗留したようで、見物人が初日は一、四〇〇人、二日目は八〇〇人に及んだことが記録されている。またその際には見物料をとつたようであり、「ふ意（不意）之錢もうけ有之候」と史料にあるのは今と変わらぬたぐましい商魂を見るようでほほえましい。（『御嵩町史 通史編』上巻より）

沿線の市町村では、ウォークラリー、や、沿線の首長が一堂に会する中山道連合などの、道に関連したイベントが春秋を中心実施されている。

歴史の道

いにしへをたどる

国頭・中頭方西海道は、那覇市首里を起点に最先端の国頭村及び沖縄本島北部周辺離島へ至る道をさす。この区間の道筋は、山あり川あり、海浜地ありで、他の街道に比べてきわめて変化に富み、また道筋にかかる悲恋物語や山賊等のエピソードも多く残っている。首里王府時代に重要な道として位置づけられた街道で、第二尚氏の尚敬王の代には大がかりな北部巡査が行われている。現在、西海道の大部分が国道五八号と重なっている。

(写真／恩納村・山田城麓の石畳道)

その四

くにがみ・なかがみほうすいわいど

国頭・中頭方西海道

琉球王府へ続く道

道は洋の東西を問わず、古くか
くやきまぎまな文物の交流の舞台

軍事的に重要な役割を担つてきた。

南西諸島における公道（王道）の整備は、三山を統一した尚氏志に端を発し、第一尚氏時代（一四七〇～一八七九年）に那覇から周辺の離島に至る海の公道に及ぶことになつたといわれる。

辺のみどころ)、伊祖城跡(県指定史跡)、当山の石畳道、浦添城跡(国指定史跡)、座喜味城跡(国指定史跡)、仲井邊遺跡(国指定史跡)、万座毛(県指定名勝)、琉球村・轟の滝(県指定名勝)、今帰仁城跡(国指定史跡)、今帰仁村仲原馬場(県指定史跡)、与那覇岳天然保護区域(国指定天然記念物)、安波のタナガーブルミの植物群落(国指定天然記念物)、田辺御園の植物群落(国指定天然記念物)、喜瀬嘉敷敷海岸の板干瀬(県指定天然記念物)、慶佐次瀬のヒルギ林(国指定天然記念物)、名護のひんぶんガジュマル(国指定天然記念物)、塙川(国指定天然記念物)、諸志御嶽の植物群落(国指定天然記念物)、田名のワバ山(県指定天然記念物)、急頭平松(県指定天然記念物)、伊江村の城山(県指定名勝)、伊是名城跡のイワヒバ群落(県指定天然記念物)、屋部の名護家(県指定有形文化財)、銘羽家住宅(国指定重要文化財)、伊是名玉御殿(県指定有形文化財)、海洋博記念公園

歴史の道——いにしへをたどる——

國頭・中頭方西海道

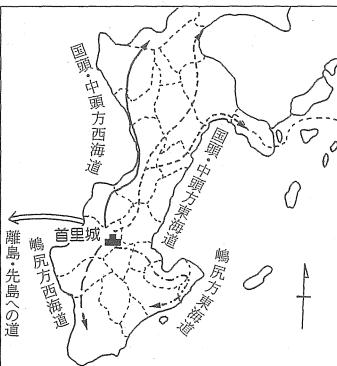
〈所在地〉

沖縄県那霸市、浦添市、宜野湾市、北谷町、嘉手納町、読谷村、恩納市、名護市、本部町、今帰仁村、大宜味村、東村、国頭村、伊江村、伊是名村、伊平屋村

卷之三

湯浦市へは那覇からバスで20分。宜野湾市、北谷町、嘉手納町方面へは那覇からバスで40分。錦谷村、恩納村方面へは那覇からバスで60分。名護へは那覇からバスで2時間。本部町、今帰仁村方面へは名護からバスで35分。大宜味村、東村、国頭村方面へは名護からバスで50分。伊江村へは本部町の港から船で30分。伊是村、伊平屋村へは今帰仁村の運天港から船で50分。

「宿道」基本ルート概略図



当山の石畳道（浦添市）



(沖縄県教育厅文化課指導主事 運天和夫)

恩納部落北西に位置した隆起サンゴ礁の上のほぼ平坦を呼ぶ。名前は、一八世紀前半、当時の琉球国王尚敬しゃうけいが國頭地方を巡視して

る。国指定天然記念物

約3.5kmの距離を歩く村教育委員会主催による「歴史ロードを歩こう」(因納村)

恩納村仲泊集落西方の琉球石灰岩丘陵の東側崖下に形成された遺跡群と近世の石畳道がある。別名比屋根坂石畳道とも呼ばれる近世の石畳道は、幅一・五～三メートル3、仲泊遺跡。

紀初期に、譲佐丸が築いたと伝えられる。城は一の郭と二の郭から構成される。城の北側には、土塁と石垣が組み合わさった複雑な構造の城門跡がある。また、城内には、土塁と石垣で囲まれた複数の施設跡が確認されている。

びる石灰岩丘陵の東の端に築かれた
城は一四世紀から一七世紀まで使
われた。北側の崖の中腹には「浦
添ようどれ」と称する英祖王陵と
尚寧王陵がある。国指定史跡。

2、座雲臺城跡

読谷村座雲臺集落北の標高一二
五メートルの丘上にある。一五世

國頭・中頭方西海道をゆく



比屋根板の石畠道（因納村）

る。しかし、大正時代の末期、那覇から名護間に県道ができるまでの交通は、海岸線と山手の徒歩であり、交通をはばむ険惡な道路であった。

国頭・中頭方西海道の中で、比較的保存状態が良好な恩納村山田、真栄田地区において昭和六三年度から文化庁の補助を得て「歴史の道保存整備事業」に着手した。現在、国の史跡指定に向けて準備を進めているところである。整備された「歴史の道」の周辺には、石畳道、一里塚、石橋などの文化財が多く、身近な歴史学習の場として広く活用されている。

国頭・中頭方西海道周辺には数多くの文化財があるが、ここでは次の五つの文化財について触れておく。

文化庁月報 1997.11 24

歴史の道

いにしへをたどる

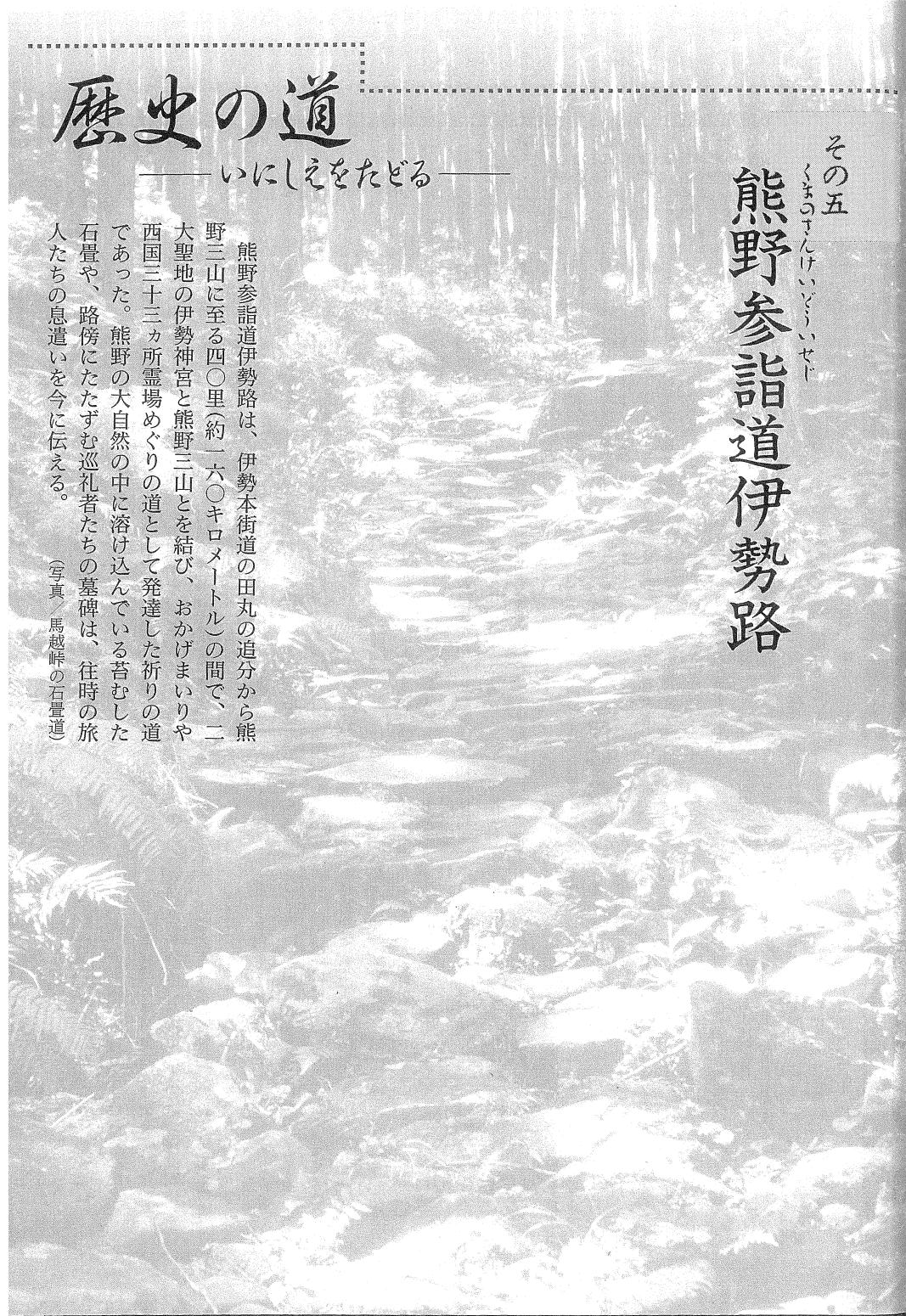
熊野参詣道伊勢路は、伊勢本街道の田丸の追分から熊野三山に至る四〇里（約一六〇キロメートル）の間で、二大聖地の伊勢神宮と熊野三山とを結び、おかげまいりや西国三十三ヵ所靈場めぐりの道として発達した祈りの道であつた。熊野の大自然の中に溶け込んでいる苔むした石畳や、路傍にたたずむ巡礼者たちの墓碑は、往時の旅人たちの息遣いを今に伝える。

（写真）馬越峠の石畳道

その五

くまのさんけいせきのじ

熊野参詣道伊勢路



信仰の道

この道は、伊勢神宮と熊野三山とを結ぶ唯一の幹線道で、紀伊半島東部の山間部を南北に縱走する東回りの道として古くから利用されたが、道筋には八鬼山越え、馬越峠をはじめ、三の峠が立ちはだかり、巡礼者たちを大いに苦しめた道でもある。

熊野信仰の歴史は古く、奥深い山々、滝、巨岩、木々など、大自然の中に宿る神々の姿を見いだしたのがおそらくその始まりである。やがて、熊野は現世を超えた異境の地との意識が高まり、奈良から平安時代にかけての仏教思想の浸透と相まって、本宮（熊野坐神社）、新宮（熊野速玉神社）、熊野那智神社のいわゆる熊野三山の結束は深まり、本宮は阿弥陀如来に、新宮は薬師如来に、那智神社は觀音菩薩に充てられ、神仏習合をこし自然に成立させる過程で熊野信仰の基盤が確立されていったものと思われる。

また、平安時代末期以降、末法思想の流行を反映した皇族・貴族の相次ぐ熊野御幸・熊野詣が、さらに熊野信仰に拍車をかけることとなつた。後白河上皇の撰に成ると伝えられる歌謡集『梁塵秘抄』に、「熊野へ参るには、紀路と伊勢路とどれ近し、広大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず」とあるように、この頃、紀路とともに「嶮岨苦難の伊勢路も」

熊野参詣道伊勢路

所在地

三重県度会郡玉城町、多気郡多気町、度会郡大宮町、同大内山村、北牟婁郡紀伊長島町、同海山町、尾鷲市、熊野市、南牟婁郡御浜町、同紀宝町、同紀和町、同鶴殿村

交通

・丸の追分へは、JR参宮線田丸駅から徒歩5分。なお、玉城町から大内山村までは旧道の面影を残すところが少ないので車で移動しつつ、要所を訪ねたい。

・ツヅラト峠へは、JR紀勢本線橋ケ谷駅下車、峠の登り口まで約4km。峠を越えて紀伊長島町の志古バス停に至るオーフコースは約6km、4時間。

・馬越峠へは、JR尾鷲駅で下車し徒歩で北上するか、路線バス（尾鷲長島線）を使い、海山町鷲毛バス停（登り口）まで移動して南下する。鷲毛バス停からJR尾鷲駅まで約5km、4時間。車なら鷲毛バス停手前の「道の駅・海山」を利用。

・八鬼山越えは、JR尾鷲駅で下車、あるいは路線バス（松本線）で向井バス停下車、歩いて10分で峠道に至る。向井バス停～峠～JR三木本駅まで約11km、6時間。

・松本駅から花の辻に至るには、JR大泊駅で下車、国道42号線を南下して、鬼ヶ城トンネルの手前を山手へ。JR大泊駅～峠～JR有井駅まで約4.5km、3時間。

周辺の見どころ

県史跡田丸城跡、原の町並み、多気町郷土資料館、柳原観音、舟木橋（国登録有形文化財）、滝原宮、大内山の一里塚、大昌寺格子塗天井、種まき櫻兵衛の里、海山町郷土資料館、真興寺はまぐり石、馬越峠の一里塚、土井竹林、慶光院清順上人の供養碑、県史跡八鬼山の一里塚、県有形民俗文化財八鬼山町石及び石造三宝荒神立像・石造不動明像、三宝荒神堂、さくらの森エリア、名柄の一里塚、曾根彈正五輪塔、北の関所跡、南の関所跡、猪垣、県天然記念物飛鳥神社樹叢、徐福の宮、國天然記念物及び名勝鬼ヶ城、附獅子岩、花の窟、県名勝及び天然記念物橋ヶ崎、熊野市歴史民俗資料館、巣の供養塔、県天然記念物市木のイブキ、引作の大ワス、綠橋（近代化遺産）、七里御浜松原遊歩道、志原川原の巡礼供養碑、ウミガメ公園、神内神社樹叢、国史跡赤木城跡及び平子帳形湯跡、丸山千枚田、鉢山資料館、楊枝薬師堂、国特別名勝及び天然記念物瀬八丁

1、原の石塗庵跡
(多気町)
伊勢参宮を終えた道者を熊野道へ導くため、庵跡に「巡礼道引鏡世音」（文化二年）の石碑が建つ。

2、大内山の一里塚(大内山村)
昭和初期までは道の両側に塚松がよばれる黒松の巨樹があつたところである。現在は東側の松のみが残る。松は代替わりしているもののかいに茶屋があつた。石積の基部しか残っていないが馬越の一里塚や桜地蔵付近の水跡跡で一息つける。馬越の一里塚及び熊野街道馬越峠道は県史跡指定。

5、八鬼山越え(尾鷲市)
いくつもの峠を越える熊野街道の中でも一番の難所といわれた八鬼山。海拔六二七メートルの険阻さに加え、かつては山賊や狼が出没して旅人を襲え上がらせたといふ。ゾッゴツとした石畳の傍らには町石を兼ねた石仏や行き倒れとなつた巡礼者の墓碑がたたずむ。

十五町石のある場所がかつての麓

3、ツヅラト峠
(大内山村～紀伊長島町)
かつて伊勢国と紀伊国の分かれ目であった峠。江戸初期に紀州藩により荷坂峠越えルートが開発されると、この峠越えの道がとられた。峠からは、淨土へと

6、八鬼山町石(尾鷲市)
八鬼山登り口の矢浜から山頂までの五〇町に地蔵の形をした町石が置かれたが、現存するのは三四体である。町石の寄進者は伊勢神宮の御師や豪商であり、平安から室町時代にかけて当地が伊勢神宮の神領であったことを示す貴重な資料となっている。

7、花の窟(熊野市)
熊野街道最後の松本峠を越え、七里御浜の海岸線に沿って平坦な街道を南下したところにある高浜街道を南下したところにある高

熊野参詣道伊勢路をゆく

往時を偲ぶことができる。県史跡指定。

1、原の石塗庵跡
(多気町)
伊勢参宮を終えた道者を熊野道へ導くため、庵跡に「巡礼道引鏡世音」（文化二年）の石碑が建つ。

2、大内山の一里塚(大内山村)

でき、いよいよ熊野をめざすんだ
とう期待を抱く地点である。

3、ツヅラト峠
(大内山村～紀伊長島町)

4、馬越峠(海山町～尾鷲市)
海山町側の登り口から峠までの約二キロメートルの坂道は端正な石畳道がよく残る。峠には江戸末期の俳人・司涼園桃乙の句碑が建

5、八鬼山越え(尾鷲市)
八鬼山登り口の矢浜から山頂近くにある三宝荒神堂の横にも茶屋があった。また、正徳二年（一七一二）築造とされる一里塚が桜茶屋一里塚（市史跡指定）として残る。

6、八鬼山町石(尾鷲市)

7、花の窟(熊野市)

8、八鬼山越え(尾鷲市)
八鬼山登り口の矢浜から山頂までの五〇町に地蔵の形をした町石が置かれたが、現存するのは三四体である。町石の寄進者は伊勢神宮の御師や豪商であり、平安から室町時代にかけて当地が伊勢神宮の神領であったことを示す貴重な資料となっている。

9、花の窟(熊野市)

10、花の窟(熊野市)

11、花の窟(熊野市)

12、花の窟(熊野市)

13、花の窟(熊野市)

14、花の窟(熊野市)

15、花の窟(熊野市)

16、花の窟(熊野市)

17、花の窟(熊野市)

18、花の窟(熊野市)

19、花の窟(熊野市)

20、花の窟(熊野市)

21、花の窟(熊野市)

22、花の窟(熊野市)

23、花の窟(熊野市)

24、花の窟(熊野市)

25、花の窟(熊野市)

26、花の窟(熊野市)

27、花の窟(熊野市)

28、花の窟(熊野市)

29、花の窟(熊野市)

30、花の窟(熊野市)

31、花の窟(熊野市)

32、花の窟(熊野市)

33、花の窟(熊野市)

34、花の窟(熊野市)

35、花の窟(熊野市)

36、花の窟(熊野市)

37、花の窟(熊野市)

38、花の窟(熊野市)

39、花の窟(熊野市)

40、花の窟(熊野市)

41、花の窟(熊野市)

42、花の窟(熊野市)

43、花の窟(熊野市)

44、花の窟(熊野市)

45、花の窟(熊野市)

46、花の窟(熊野市)

47、花の窟(熊野市)

48、花の窟(熊野市)

49、花の窟(熊野市)

50、花の窟(熊野市)

51、花の窟(熊野市)

52、花の窟(熊野市)

53、花の窟(熊野市)

54、花の窟(熊野市)

55、花の窟(熊野市)

56、花の窟(熊野市)

57、花の窟(熊野市)

58、花の窟(熊野市)

59、花の窟(熊野市)

60、花の窟(熊野市)

61、花の窟(熊野市)

62、花の窟(熊野市)

63、花の窟(熊野市)

64、花の窟(熊野市)

65、花の窟(熊野市)

66、花の窟(熊野市)

67、花の窟(熊野市)

68、花の窟(熊野市)

69、花の窟(熊野市)

70、花の窟(熊野市)

71、花の窟(熊野市)

72、花の窟(熊野市)

73、花の窟(熊野市)

74、花の窟(熊野市)

75、花の窟(熊野市)

76、花の窟(熊野市)

77、花の窟(熊野市)

78、花の窟(熊野市)

79、花の窟(熊野市)

80、花の窟(熊野市)

81、花の窟(熊野市)

82、花の窟(熊野市)

83、花の窟(熊野市)

84、花の窟(熊野市)

85、花の窟(熊野市)

86、花の窟(熊野市)

87、花の窟(熊野市)

88、花の窟(熊野市)

89、花の窟(熊野市)

90、花の窟(熊野市)

91、花の窟(熊野市)

92、花の窟(熊野市)

93、花の窟(熊野市)

94、花の窟(熊野市)

95、花の窟(熊野市)

96、花の窟(熊野市)

97、花の窟(熊野市)

98、花の窟(熊野市)

99、花の窟(熊野市)

100、花の窟(熊野市)

101、花の窟(熊野市)

102、花の窟(熊野市)

103、花の窟(熊野市)

104、花の窟(熊野市)

105、花の窟(熊野市)

106、花の窟(熊野市)

107、花の窟(熊野市)

108、花の窟(熊野市)

109、花の窟(熊野市)

110、花の窟(熊野市)

111、花の窟(熊野市)

112、花の窟(熊野市)

113、花の窟(熊野市)

114、花の窟(熊野市)

115、花の窟(熊野市)

116、花の窟(熊野市)

117、花の窟(熊野市)

118、花の窟(熊野市)

119、花の窟(熊野市)

120、花の窟(熊野市)

121、花の窟(熊野市)

122、花の窟(熊野市)

123、花の窟(熊野市)

124、花の窟(熊野市)

125、花の窟(熊野市)

126、花の窟(熊野市)

127、花の窟(熊野市)

128、花の窟(熊野市)

129、花の窟(熊野市)

130、花の窟(熊野市)

131、花の窟(熊野市)

132、花の窟(熊野市)

133、花の窟(熊野市)

134、花の窟(熊野市)

135、花の窟(熊野市)

136、花の窟(熊野市)

137、花の窟(熊野市)

138、花の窟(熊野市)

139、花の窟(熊野市)

140、花の窟(熊野市)

141、花の窟(熊野市)

142、花の窟(熊野市)

143、花の窟(熊野市)

144、花の窟(熊野市)

145、花の窟(熊野市)

146、花の窟(熊野市)

147、花の窟(熊野市)

148、花の窟(熊野市)

149、花の窟(熊野市)

150、花の窟(熊野市)

151、花の窟(熊野市)

152、花の窟(熊野市)

153、花の窟(熊野市)

154、花の窟(熊野市)

155、花の窟(熊野市)

156、花の窟(熊野市)

157、花の窟(熊野市)

158、花の窟(熊野市)

159、花の窟(熊野市)

160、花の窟(熊野市)

161、花の窟(熊野市)

162、花の窟(熊野市)

163、花の窟(熊野市)

164、花の窟(熊野市)

165、花の窟(熊野市)

166、花の窟(熊野市)

167、花の窟(熊野市)

168、花の窟(熊野市)

169、花の窟(熊野市)

170、花の窟(熊野市)

171、花の窟(熊野市)

172、花の窟(熊野市)

173、花の窟(熊野市)

174、花の窟(熊野市)

175、花の窟(熊野市)

176、花の窟(熊野市)

177、花の窟(熊野市)

178、花の窟(熊野市)

179、花の窟(熊野市)

180、花の窟(熊野市)

181、花の窟(熊野市)

182、花の窟(熊野市)

183、花の窟(熊野市)

184、花の窟(熊野市)

185、花の窟(熊野市)

186、花の窟(熊野市)

187、花の窟(熊野市)

188、花の窟(熊野市)

189、花の窟(

歴史の道

いにしへをたどる

その六

くまのさんけいのじゆうじゆ 熊野参詣道紀路

「蟻の熊野詣」で知られる熊野参詣道紀伊路・中辺路は、滅罪と救済を保証する熊野権現の加護を願い、紀伊半島の南部のクマ(隈)の地コモリ(隠)の地に鎮座する熊野三山、すなわち熊野本宮大社(古くは熊野坐神社)、熊野速玉大社(熊野速玉神社)、熊野那智大社(熊野大須美神社)へ参拝する平安時代に拓かれた参詣道である。熊野古道とも呼ばれ、熊野三山を訪れるハイカーは、今も絶えることはない。

(写真／那智山大門坂の杉並木)

「祈りの道」熊野参詣道

熊野三山への人々の巡礼は平安時代の半ば以降、都の貴顕を中心とする山岳信仰や

神仏習合、淨土信仰の広がりのなか盛んとなり、熊野の神は全国に勧請された。中世には

武家階級が、近世になると伊勢参拝や西国三十三ヶ所巡礼をかねての熊野参詣が広く庶民階層にも行われ、多くの茶屋や一里塚も設置された。

熊野三山への参詣道には紀路と伊勢路があつた。平安時代末期の後白河法皇の撰という『梁塵秘抄』卷二には「熊野へ参るには紀

路と伊勢路とどれ近し、どれ遠し広大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず」とある。

紀路をたどるには、都の下鳥羽より船に乗り淀川を下り摂津・渡辺の津へ上陸した。そ

の後、紀伊國風土記に「手束弓トハ、紀伊國ノ雄山ノセキ守ノ持弓云々」とある和泉・紀

伊國境の雄の山峯を越え紀伊国に入った。

紀伊における参詣道のうち雄の山峯（和歌

山市）から熊野の入り口にあたる牟婁（紀伊

半島南部の古称）の出立王子（田辺市）まで

を紀伊路、出立王子から熊野本宮大社（東牟

婁郡本宮町）までを中辺路と呼び、院政期に

おいて最も利用され、後白河上皇三回前後

を最高に、かなりの頻度で参詣を重ねている。

当時の参詣の様子は藤原為房の『為房卿

線あるいはこれと並行するJR紀勢線を利用すれば便利。JRでも熊野参詣道（熊野古道）を歩くイベントを行っている。

中辺路を経由して本宮へはJR紀勢線紀伊田辺駅から国道311号線沿いにJRバスがある。また本宮から新宮までも国道168号をJRバスが運行している。

（ボランティアガイド）

紀州語り部として和歌山県観光ガイド専門員制度が県下に広く設置されており、熊野参詣道を専門とする語り部が、海南市商工振興課（0734-82-4111）、下津町観光協会（0734-92-1212）、有田市商工観光課（0737-83-1111）、印南町観光協会（0738-42-0120）、田辺市経済課（0739-22-5300）、中辺路町観光協会（0739-64-1470）、本宮町観光協会（07354-2-0200）、熊野川郡智勝浦町観光課（07355-2-0555）にあかれている。このほか、熊野参詣道が所在するほとんどの市町村に歴史、文化財専門の語り部がおかれている。

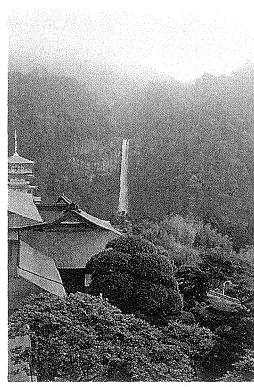
熊野参詣道紀路

〈所在地〉

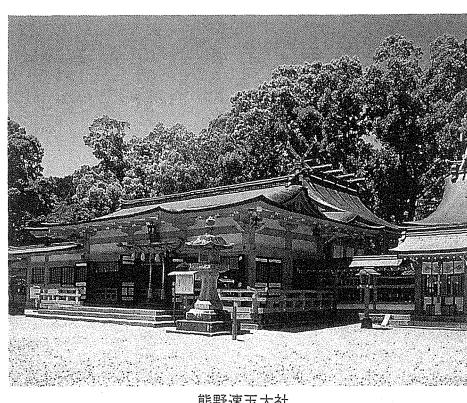
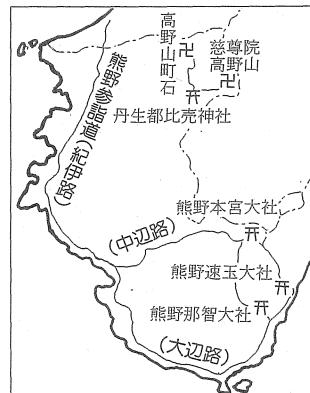
- 紀伊路／和歌山市 海南市 海草郡下津町 有田市 有田郡湯浅町・広川町 日高郡日高町・印南町・南部町 御坊市 田辺市
- 中辺路／田辺市 西牟婁郡上富田町・大塔村・中辺町 町 東牟婁郡本宮町
- 大辺路／田辺市 西牟婁郡白浜町・日置川町・さざみ町・串本町 東牟婁郡古座町・古座川町・太地町・那智勝浦町 新宮市
- 大雲取・小雲取越え／東牟婁郡那智勝浦町・熊野川町・本宮町
- 大日越え／東牟婁郡本宮町

〈交通〉

紀伊路・大辺路へは紀伊半島の海岸線を走る国道42号



那智大滝遠望



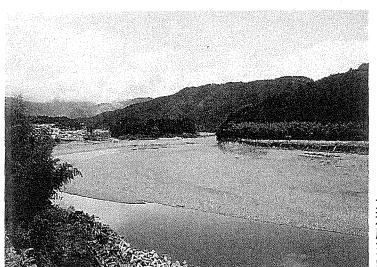
熊野速玉大社

歴史の道——いにしへをたどる

記』、藤原宗忠の『中右記』、藤原定家の『後鳥羽院熊野御幸記』をはじめとする多くの貴族や僧侶の日記、記録に詳細に綴られている。貴顕のみならず庶民また病苦の旅行者も多かつたと記され、およそ京からの往復一ヶ月弱の旅行だったようである。そうした利用につれて、参詣道の整備も進み、紀路の最大の特色となつた熊野九十九王子社が成立した。熊野九十九王子社は熊野権現の神子を御分霊として祀つた社などともいわれ、『後鳥羽院御幸記』建仁元年（一二〇一）の記載から、平安時代末期には参詣道沿いに九十九王子が成立したものと考えられている。摂津・

第一王子社として建津王子社が祀られ、これより九十九王子社の巡拝を重ね、最後に祓戸王子の参拝を終え熊野本宮大社に参詣したの

である。



大斎原遠望

熊野参詣道紀路をゆく

1. 紀伊路

あつたようだ。

雄の山峯を越えたあと、紀ノ川を渡り南下し藤代若一王子（海南市）に着く。ここより藤代峠など

の山並みを横断し、時には千里の浜などの海岸線に出ながら牟婁の王子（牟婁王子）に至る。

紀伊路にはこのほか、有田・日高郡境界の石畳が美しい鹿ヶ瀬峠を避け、有田川南岸の山塊の峠に位置する糸我王子（有田市）近

くの海岸から海路で比井王子（日高郡日高町）へ詣でたあと再び熊野参詣道へ合流するコースなどが

なつていた。

那智大滝水源の那智原始林を迂回し、熊野灘を見下ろす舟見峠に至る。石倉時、越前峯を越え熊野南端の瀬戸から海岸線を北上するコースがある。これらの参詣道が大辺路と呼ばれている。

4. 大雲取・小雲取越え

熊野三山からの帰路は、那智から再び本宮に戻ることが一般的と

なつていた。

那智大滝水源の那智原始林を迂回し、熊野灘を見下ろす舟見峠に至る。石倉時、越前峯を越え熊野南端の瀬戸から海岸線を北上するコースがある。これらの参詣道が大辺路と呼ばれている。

5. 大日越え

熊野三山から戻ることになる。

新宮・那智への参詣は、中辺路をとらず紀伊半島南部の海岸線を陸路または海路で南下し、半島最南端の瀬戸から海岸線を北上するコースがある。これらの参詣道が大辺路と呼ばれている。

6. あとがき

熊野参詣道は、私たちのまほら

ば・再生のふるさととしていつまでも愛され続けたい道の一つである。関係団体は昭和五三年以降、熊野参詣道の整備を継続実施し、

平成一年には熊野体験博が開催され、皆様にぜひ熊野を体験していただきたい。

神社を遙拝する伏押王子（本宮町）を経て、尾根道を下れば大斎原と呼ばれる熊野川の中洲状地形に鎮座する熊野坐神社旧社地に至る。

歴史の道

いにしへをたどる

その七

おしゅう

奥州街道

蓑ヶ坂、長坂・高山越

江戸日本橋から北上を続けた奥州街道（道中）は、釜沢（二戸市）の先で小沢を渡り、青森県に入る。蓑ヶ坂から国道まで一・五キロメートル、坂の上部の道は良好だ。任務を終えた旧街道が持つ雰囲気は、歴史の道百選にふさわしい。長坂・高山越は一五キロメートル、南部氏の城館と文化財の見学、坂また坂、一里塚を数えて進む旧道の旅が体験できる。歴史の道の調査は地域の関心を呼び起こし、道筋の施設も整備された。六月二八日には、「歩き・み・ふれる歴史の道」ブロック大会も開催される。歴史の道百選の旅を味わってほしい。

（写真／長坂を上る奥州街道）

歴史の道

いにしへをたどる

羽州街道は、奥州街道の桑折から分岐し、山形諸藩領を抜け院内杉峠を越えて久保田藩領に入る道である。

天和元年（一六八二）の『領中大小道程』（秋田県公文書館所蔵）という記録によると、杉峠から久保田城下・大館城下を経て津軽藩領境の矢立峠に至る久保田藩内の羽州街道は、六三里四町二三間の道程であるとされている。

（写真　萩長森山麓を北へ向かう羽州街道、斐谷地西側付近）

その八

じゅうかいば

羽州街道

矢立峠越

その八

じゅうかいば

矢立峠越

歴史の道

いにしへをたどる

その九

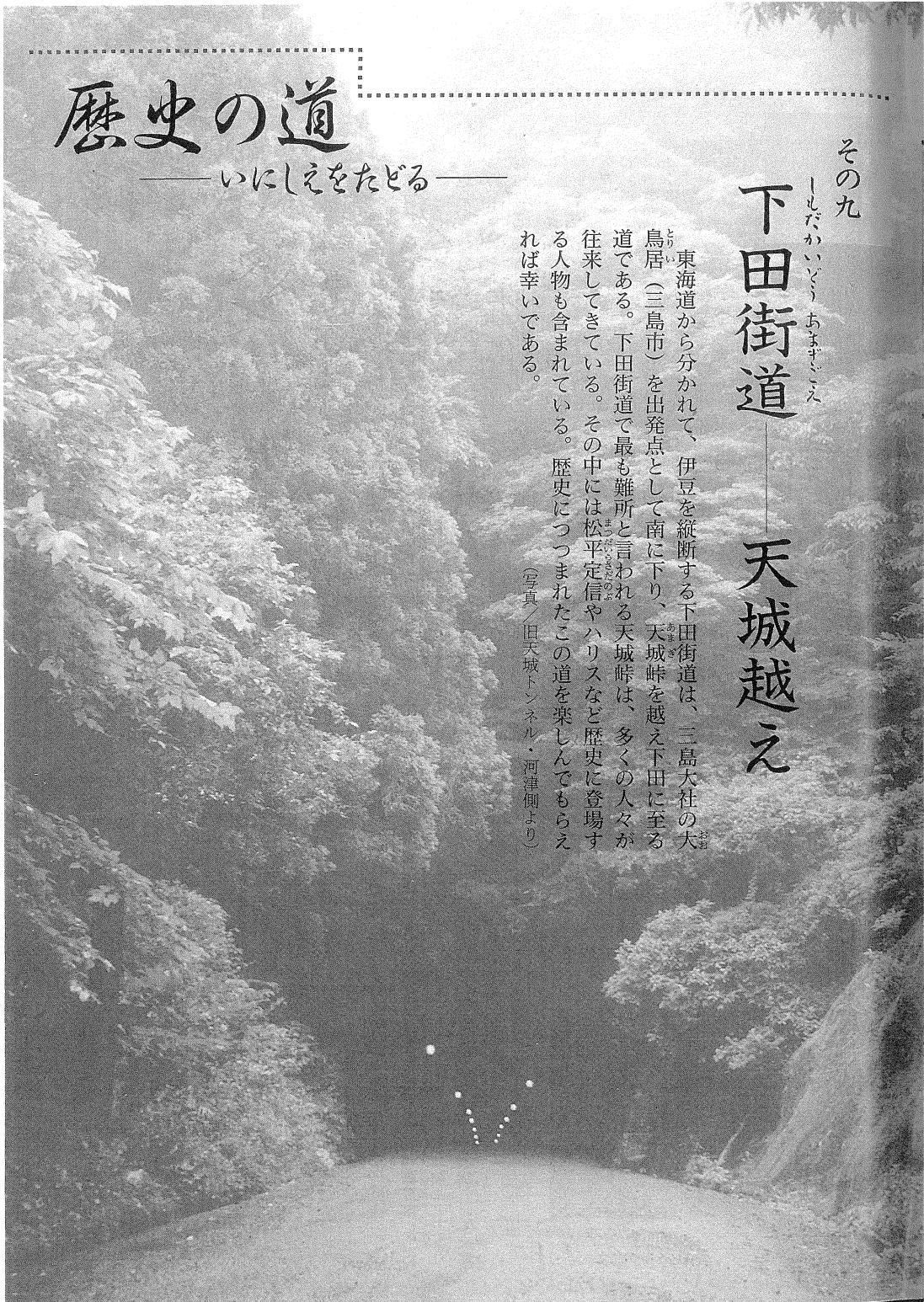
しもだかいじょう あまやまこみ

下田街道

天城越え

東海道から分かれて、伊豆を縦断する下田街道は、三島大社の大鳥居（三島市）を出発点として南に下り、天城峠を越え下田に至る道である。下田街道で最も難所と言われる天城峠は、多くの人々が往来してきている。その中には松平定信やハリスなど歴史に登場する人物も含まれている。歴史につづまれたこの道を楽しんでもらえれば幸いである。

（写真）旧天城トンネル・河津側より



下田街道——天城越之

《河津町／二本杉歩道(旧天城峠)ハイキングコース》

〈交 通〉
河津駅からバス修善寺駅行で35分、
登尾下車。

〈周辺のみどころ〉

伊豆の踊子文学碑／ワサビ田／河津七滝ループ橋／宗太郎園地／いのしへ村／淨蓮の滝／八丁池／川端康成文学碑／万二郎岳／万三郎岳／しらぬたの池／伊豆バイオパーク／観音山石臼群

なあ、付近には多数の温泉がある。

〈天城ミニガイド〉

伊豆半島は三方を海に囲まれ、特に沿岸地帯は温暖な気候であるが、天城では冬には池や滝が凍り、霧氷も見られる。天城山の雨量は年間3,000ミリを越え、日本の中でも多雨地域といえる。天候が安定しているのは4・5月と10月から秋にかけて

■河津の観光や宿の問い合わせについては、河津町観光協会（☎0558-32-0290、0323）へ。



當時、少しの雨でも「小河同様になる」と言われた天城越えの道は、道や橋の保持は極めて困難であった。このため新道が建設されている。このルートは湯ヶ島側より二本杉峠を越え河津側に出る道で、文化一〇年（一八一三）から文政二年（一八一九）までかかつて完成した。ここまで時間がかかつた理由のひとつは、徳川幕府の御用林^{ごようりん}であつたために木一本を切ることも厳しく禁じられていたからである。この絵は、この新道を記念して作成された「伊豆勝図」を描いている。これは当時の伊豆を知る重要な絵画資料となつてゐる。

下田街道のもともとの天城越えはどのようになつていただろうか。研究者によれば、古峠ことうげを通る道としている。この道は現在の新天城トンネルと二本杉峠の中間に位置している。このルートでは、標高九〇〇m以上の山を二つ越えなければならず、全長は約六里となる。またこの道は、河津側からの天城越えには近道だが、急すぎる道であるため利用された期間は短かつたとされている。現在「古峠」の標識は立っているが、河津側の道はわからない。天城越えは、寛政五年（一七九三）三月、老中・公平定信

下田街道——天城越えの歴史

のものとも

この天城越えはどのよう

3、幕末の天城越

安政元年（一八五四）、日米和親條約が締結されて下田が開港された。その前後では幕府

の増大につながり、当時の各村に多大の出費を強いる結果となつた。明治二年（一八六九）になつても「未タ済方難出来、年々利済モ届兼、難済仕詰居候」（⁴助郷御組替ニ付取調書）

になつても「未夕清方難出来、年々利済モ届兼、難済仕詰居候」(助郷御組替ニ付取調書)

勘定奉行や薄賀奉行が伊豆を頻繁に訪れて、
安政四年（一八五七）には日米修好通商条
約を結ぶ必要性から、初代アメリカ総領事の
ハリスが江戸に向かうために天城越えを行つ
たのである。

4、近・現代の天城越え
明治三八年（一九〇五）、石造り全長四四六
m、幅四・二mの天城トンネルの開通によつ
て下田街道は車でも通れる道となつた。これ
により難所であった天城越えは解消された。
また、大正一三年（一九二四）のバスの開通

下田街道——天城越えをゆく

田街道——天山

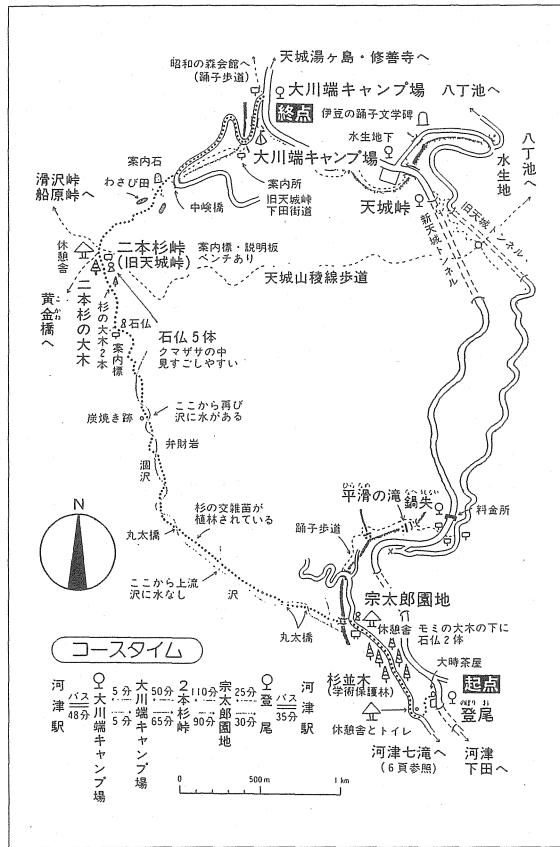
越えをゆく

る重要な絵画資料となつてゐる。

当時、少しの雨でも「小河同様になる」と言われた天城越えの道は、道や橋の保持は極めて困難であった。このため新道が建設されている。このルートは湯ヶ島側より二本杉峠を越え河津側に出る道で、文化一〇年（一八一三）から文政二年（一八一九）までかかって完成した。ここまで時間がかかった理由のひとつは、徳川幕府の御用林であつたために木一本を切ることも厳しく禁じられていたからである。

『歴史の道百選』に選ばれた区間を南から歩いていきたい。
(1) 小鍋から梨本（河津町）まで
「小鍋」という地名は、その昔源頼朝が河津を訪れたとき、炊事の道具を周辺の村々から集めた際この地区が小さな鍋を持ってきたのでこの地名がついたと伝えられている。この区間は石造物が多く残っており、近世の街道筋の雰囲

氣を今に伝えている。石造物は庶民の信仰を表した大日如来、石の祠や玉箇印塔、道標などがある。宝篋印塔のなかには、曾我物語で知られた工藤祐経の祖母である水草の墓と伝えられているものもある。



27 文化庁月報 1998.9

歴史の道 いにしえをたどる

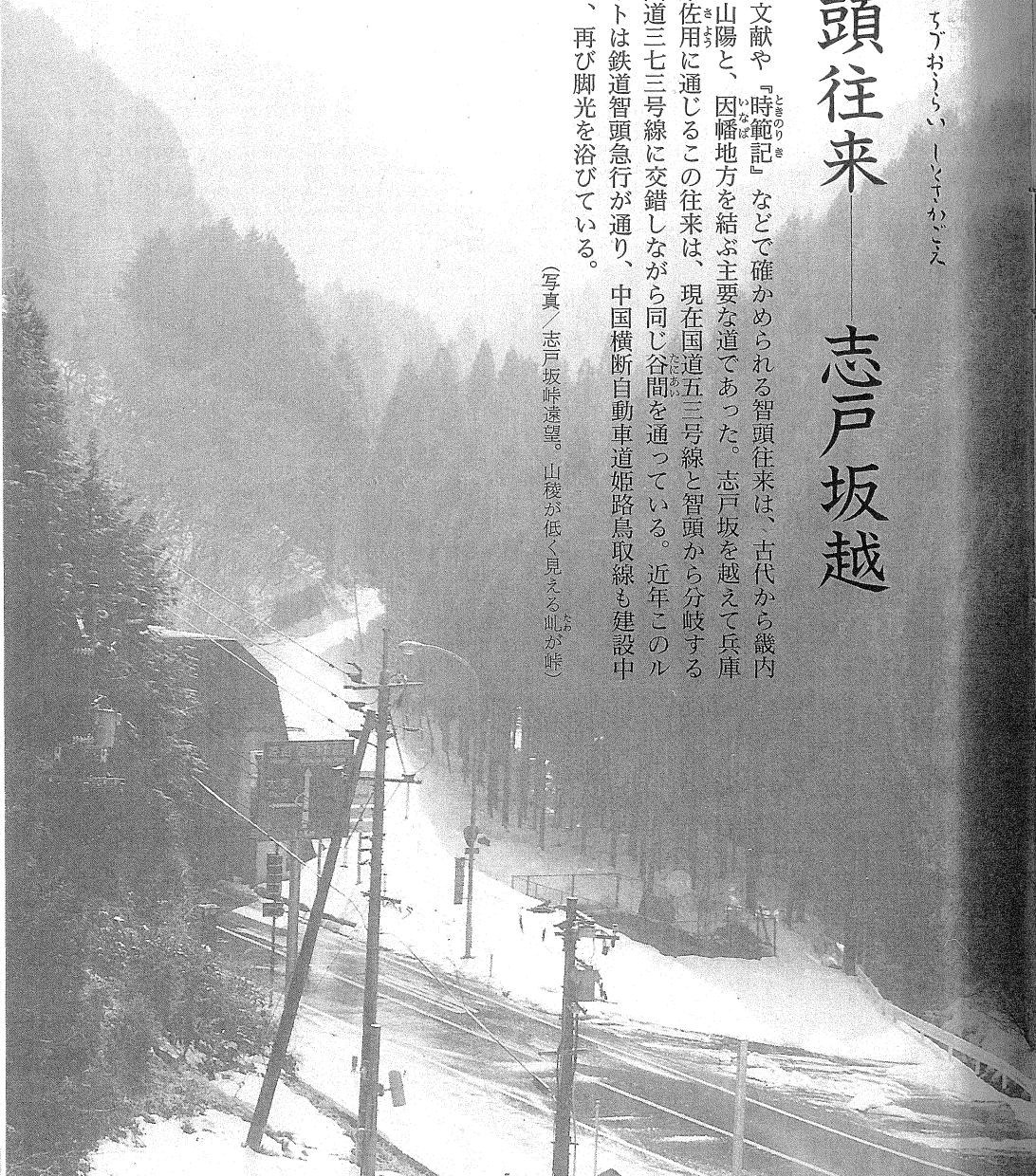
その十

智頭往来　志戸坂越

智頭往来　志戸坂越

文献や『時範記』などで確かめられる智頭往来は、古代から畿内や山陽と、因幡地方を結ぶ主要な道であった。志戸坂を越えて兵庫県佐用に通じるこの往来は、現在国道五三号線と智頭から分岐する国道三七三号線に交錯しながら同じ谷間を通っている。近年このルートは鉄道智頭急行が通り、中国横断自動車道姫路鳥取線も建設中で、再び脚光を浴びている。

(写真)志戸坂峠遠望。山稜が低く見える眺め



因幡国司が赴任した道

『播磨國風土記』は、伯耆の加賀
具漏と因幡の邑由湖の二人が大いに好む、節
度がないのを知った仁徳天皇が、狭井連佐夜
を使わして二人を召しだすの途中、佐夜が
彼等を水中に漬けたところが、「美加都岐原」
という説話を伝えている。美加都岐原は現在
の兵庫県佐用郡三日月と比定されていて、古
代から因幡地方と大和方面へのルートであつ
たことがうかがえる。

山陰道が正式な交通路であったが、平安時代の日記・紀行文を見ると、山陰地方と都との往来は陰陽山越えの道と、山陽道の組合わせがほとんどであり、山陰道はあまり利用されなかつたと推測される。したがつて、近世の智頭往来にある道は、奈良・平安時代においても因幡と京を結ぶメインルートであり続いたであろう。さて、平安時代の承徳三年（一〇九九）二月にこのルートを通り、志戸坂峠を越えて、因幡国司として赴任した人物に平時範がいる。彼は任国の因幡に赴き、三月まで因幡国府に滞在している。その頃の日記が残されていて『時範記』と呼ばれる。それに

智頭往来——志戸坂越

《所在地》 烏取県八頭郡智頭町大字市瀬から大字駒帰と岡山県
英田郡西粟倉村坂根までの間

《交通案内》智頭宿の町並みまではJR因美線智頭駅、智頭急行智頭駅から0.5km、篠ヶホギまで4km、篠坂から毛谷まで1.5km、中原岡ノ鼻五輪塔、観音堂までは智頭急行山郷駅から2、3km。志戸坂までは智頭急行山郷駅から0.5km、志戸ノ瀬から割引瀬までは2、3km、志戸坂ままで5km。坂根までは智頭急行あわくら温泉駅から2km、志戸坂まで5km。

- ボランティアガイド
智頭町観光女性ボランティア
連絡先：萌音……（歴史の道は研修中）
鳥取県八頭郡智頭町大字智頭1820
喫茶樹里
（代表者／国岡千春）
☎0858-75-0080
- 智頭町文化財保護審議会
智頭町教育委員会生涯学習課
☎0858-75-3113

(1) 篠ヶホキ－市瀬
享保六年（一七二一）の『因府志』
上京海道記はこれを「甚キ難所トイエトモ、カ
東海道處々難所トイエトモ、カ
ル危険ナ處ナシ」と語つてゐる
(2) 関屋・智頭宿
関屋は戦国時代の番所跡、智頭
宿の町並みは往時の景観を伝えて
いる。
(3) 篠ヶ周辺－タワニン堂
篠ヶ周辺の山裾に古道が残り、地
蔵などが往来の歴史を伝える。
(4) 中原岡ノ鼻五輪塔－觀音堂
柿の大木の下に宝篋印塔が並び
古い歴史と郷愁を誇る風景がある

智頭往来——志戸坂越をゆく

鳥取市から国道五
三号線を南に三〇五の用瀬町と智
頭町との境は、山峠の険しい地形
で「縦ヶホキ」と呼ばれる。明治
一六年以前は山腹を廻る危険な道
が智頭往来であった。トンネル入
口脇の道端は、宝曆五年（一七五
五）一月の銘がある二体の石地
蔵が祀られている。ここから智頭
往来の古道は姿を見せる。歴史の
道百選に選定された智頭往来は
これより始まり、御立山（瀬瀬
の中腹のホキ道を巡って市瀬町葵
の茶屋居に降り、千代川沿いに
上流をめざして遡る。
宿場であった智頭の町中を通り
て本谷（山形・山郷地区）を上り
最奥の村・駒場を過ぎると志戸坂

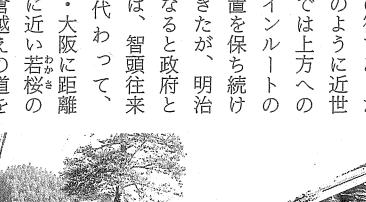
の峠道である。篠ヶホキの起点から志戸坂峠まで約10km、峠の頂上から下つて岡山県西粟倉村坂根まで約11km、歴史の道の選定区間は全長11kmである。

だが、11km全部が往来の古道ではなく、国道や町道に併合され形を変えた部分も多い。それでも次の六ヶ所に昔ながらの古道が残つており、往来の面影を偲ぶことができる。

よると、一月九日に京を出発した時範は、山陽道を経て一四日に美作国境根（西粟倉村坂戸）に到着した。翌早朝雷雪（よのづか）のなかを出発し、卯刻（午前六時頃）に鹿鹿御坂（志戸坂峠）で「境迎え」の儀式を行い国入りしている。近世になつて鳥取藩は江戸幕府に倣い、寛永九年（一六三二）に宿駅を定め、伝馬を備えて智頭往来を重視した。それは智頭往来が上方への主街道であつただけではなかつて、この道が参勤交代の道であつたからである。初代藩主池田光仲が、慶安元年（一六四八）に最初の正式な入国以来、一二代藩主池田慶徳（よのり）の文久二年（一八六二）までの二一四年間に一七八回往復している。参勤交代は智

（県庁佐用町）が
次の宿であった。
このように近世
までは上方への
メインルートの
位置を保ち続け
てきたが、明治
になると政府と
県は、智頭往来
に代わって、
京・大阪に距離
的に近い若狭の
戸倉越えの道を
重視しはじめた。

智頭往来と備前街道の分岐点辺りの智頭
町並み



(5) 檜見・魚ノ棚・副ヶ瀧
俗に「魚ノ棚」と呼び、「海運記」
は「此處ニ絶景アリ」と賞賛する
溪流がある。また、副山と副ヶ瀧
は因幡の名所の一つと伝えられ、
古歌も残る。

(6) 駒帰・志戸坂峠・坂根
この六ヶ所はそれぞれの特徴が
あり、周辺の風景が見どころでもある。
わけても志戸坂峠は庄若谷の
杉・檜林の立木の中の坂道を延々
と約二・五km標高五八五mの峰
頂上の風景もすばらしい。訪れた
歴史研究者は一様に「歴史も古く
すばらしい峠だ」と賞賛する。散策

会で歩いた町民からは、「私たちの町に、こんなにたくさん歴史の道が残っているとは知らなかつた」と驚嘆の声を聞く。しかし、沿道の地域住民はそれが歴史の道で、どんな価値があるのか関心は低い。智頭町は昨年から町民を対象とした歴史の道散策説明会を実施するなど、啓発活動を行なうとともに、国の補助事業を受けて今年秋より中原の岡ノ鼻五輪塔・觀音堂・燈見の舟ノ棚・副ヶ瀧周辺の歴史の道の整備に着手した。平成一五年度まで六年間かけて、順次全線を整備していく計画である。

歴史の道

いにしえをたどる

その十一

橋原街道

坂本龍馬脱藩の道

文久二年（一八六二）春、幕末の風雲急を告げる時局を洞察し、自らの使命を自覚した高知の郷士・坂本龍馬は、決然として土佐を脱藩した。新しい時代の到来を夢見て、一八歳の青年武士龍馬がひた走りに走った道、橋原街道をたずねてみよう。

（写真 橋ヶ崎付近の道）

坂本龍馬脱藩の道

坂本龍馬は天保六年（一八三五）、高知城下の郷士、坂本八平・幸の二男として生まれた。「泣き虫、はなたれ、よばあ（寝小便）たれ」と呼ばれる虚弱な少年であつたが、母の没後、男勝りの姉、乙女の薰陶を受け、たくましく変身し、土佐では並ぶ者のない剣豪に成長した。

一九歳のとき、江戸は千葉定吉の門で剣の修業をする龍馬は、浦賀でベリーの四隻の黒船を見て、新しい時代の息吹と外国のアジア支配の脅威を実感する。

そして武市瑞山が率いる土佐勤王党に血盟加入、藩政の改革を図るが、因循固陋な藩の体質に失望し、決然として土佐を脱藩した。文久二年（一八六二）三月、龍馬二八歳の春であった。

三月二十四日に、同志の沢村惣之丞（のちの変名、関雄之助）とともに高知を発つた龍馬は、西に向かい現在の伊野町・日高村・佐川町を通り、幡蛇森の朽木峠を越え、葉山村・東津野村を経て、二五日の夜、櫛原町太郎川の那須俊平・信吾父子の家に宿泊した。

翌二六日早朝、那須父子の道案内で四万川の高野ヶ峠を破り、正午頃、国境の大野ヶ原は菲ヶ峠を越えて脱藩した。道案内の一人、那須信吾は、ここから櫛原へ引き返している。

■龍馬脱藩の道に関する問い合わせ先
高知県櫛原町教育委員会生涯学習課
☎0889-65-1111
愛媛県河辺村役場総務課
☎0893-39-2111



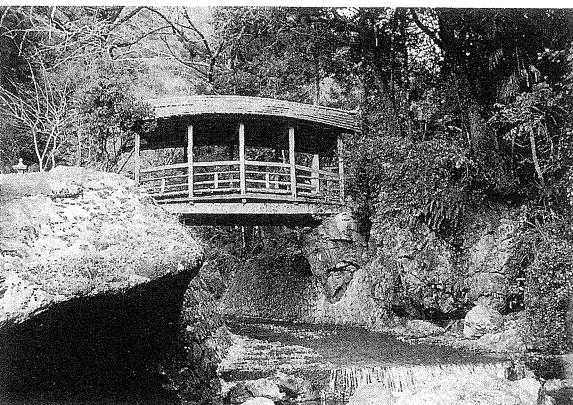
宿間舟着場

櫛原街道

櫛原 → 5.2K 80分 宮野々関跡 → 4.5K 70分 六丁 → 2.5K 40分 茶屋谷
6.0K 150分 売ヶ峠 → 2.0K 30分 大師堂下 → 5.5K 100分 横ヶ峠登り
4.0K 60分 神納（御幸の橋） → 4.2K 90分 封事ヶ峠 → 2.0K 30分
三杯谷の滝 → 2.2K 60分 水ヶ峠 → 2.8K 50分 泉ヶ峠 → 2.6K 50分 石上峠 → 2.4K 40分 白岩の大清水 → 2.0K 30分 宿間



国木付近



屋根のある橋として知られる県民文化財「御幸の橋」

伊予路に入った龍馬らは、大洲藩領の小屋村（現在は愛媛県野村町）から横ヶ峠を越えて、横通り・封事ヶ峠・三杯谷・日除・水ヶ峠（いずれも河辺村）を通り、泉ヶ峠に着き脱藩後の第一夜を過ごした。

二七日、北表村を経て宿間村（いずれも五ヶ崎町）に着いた。道案内の那須俊平は、こから櫛原へ引き返している。

龍馬と惣之丞は宿間から川舟に乗り、小田川・肱川を下り、正午頃大洲町（大洲市）に着いた。ここで昼食をとり、さらに舟で下り、夕方、長浜村（長浜町）の富屋金兵衛方（現在の富田運夫氏方）へ宿泊、翌日長浜港を出港して、長州へと向かった。

それから先五年間、龍馬の獅子奮迅の働きにより明治維新は成るが、その革命前夜、慶応三年（一八六七）一月一五日、龍馬は盟友の中岡慎太郎とともに、京都の近江屋に倒

港して、長州へと向かった。

それから先五年間、龍馬の獅子奮迅の働きにより明治維新は成るが、その革命前夜、慶応三年（一八六七）一月一五日、龍馬は盟友の中岡慎太郎とともに、京都の近江屋に倒

港して、長州へと向かった。

脱藩は龍馬の運命を決したばかりでなく、日本の運命もを変えた。土佐と伊予の山中に

原町から愛媛県五十崎町までの約五〇kmの道は、文化庁から「歴史の道」に選ばれた。

道は関係町村によって保存整備が行われ、標識等も設置されている

（1）「歴史の道」に選ばれた櫛原街道

橋の上に保存されているのがうれしい。

我々も龍馬になつて、自らの使

命と日本の将来を考えながら、橋

旅姿がある。

道は四万川の宮野々関跡を越え、

橋の上に保存されているのがうれしい。

我々も龍馬になつて、自らの使

命と日本の将来を考えながら、橋

歴史の道

いにしへをたどる

その十二

大口筋 白銀坂

おおくちすだいらぎんざか

大口筋は東日筋ともい、鹿児島城下から熊本・宮崎へ向かう江戸時代の重要な街道であつた。大口筋上の難所として知られた白銀坂は、古代の薩摩と大隅の国境に位置し、その急峻な峠道は多くの旅人を悩ませてきた。現在約半里の道のりに昔ながらの石畳が残り、歴史を体感できる古道として、自然観察や眺望を楽しむ人々に活用されている。

(写真)一九九七年度に整備を終えた白銀坂の石畳

